

# 歴史学と「文化学」の形成

— 郡山女子大学短期大学部文化学科の試み —

Formation of “cultural studies” by historical studies

An Attempt of the Department of Cultural studies at Koriyama Women’s College

桑 野 聡\*

Satoshi KUWANO

In this thesis, we explore the cultural science of Koriyama Women’s University, which stands at a branch point, the point of contact between the history of historical studies in Western history research and the cultural science of our university. In conclusion, in the transformation of the modern society, while trying to reconstruct the historical images which can not be drawn by document history alone while complementing mutually complementary historical relations such as social history while utilizing interdisciplinary methodology I want to confirm the attempt as a cultural studies. I would like to point out that these attempts have points of contact with attempts by the home economics of our university to sublimate life culture as comprehensive study.

## はじめに

2018 (平成30) 年度をもって郡山女子大学短期大学部文化学科は38年の歴史を閉じる。文化学科の設置は、戦後の高度経済成長が安定期を迎えた1970年代後半～80年代の「地方の時代」の提唱と密接に関わっていた。地域の歴史と文化を学び、その地域の文化・教育活動に貢献できる人材の育成を目指して、人文系諸学問を学際的に学ぶ特色を持った文化学科は、1981 (昭和56) 年4月の開設以来、司書、学芸員、社会教育主事をはじめ、多くの文化・教育施設の利用者・支援者を輩出してきた<sup>1</sup>。2000 (平成12) 年4月には専攻科文化学専攻が開設され、文学士 (歴史学) を取得することが出来るようになった<sup>2</sup>。この専攻科は、今回の学科改編後も存続する予定であり、文化学科の学問的系譜は専攻科と新設の地域創成学科のカリキュラムの中に継承されていると言えよう。

38年間の文化学科のカリキュラムを概観するならば、これを大きく3期に区分することが出来る。現学科主任の齋藤美保子は、副主任・教務担当時代に2002 (平成14) 年度からのカリキュラム改編に際して、創設時の第1期を「地方の時代対応型」、1996 (平成8) 年度からの第

---

\* 文化学科／地域創成学科

2期を「日本・国際文化並列型」、そして現行のカリキュラムの母体となる第3期を「地域文化発信型」と称して、文化学科の学びの特徴を整理している<sup>3</sup>。筆者が知る範囲では、学生数が最大規模を有した第2期の改編では日本文化と国際文化の2コース分けが試みられ、1年次に「文化学入門Ⅰ・Ⅱ」がオムニバス形式で実施されると共に、各専門分野の基礎部分が「日本文化史論Ⅰ～Ⅳ」「西洋文化史論Ⅰ・Ⅱ」「東洋文化史論」などと共通の名称でまとめられることで、2年次の民俗学・考古学・美術史などの専門科目と卒業研究を核とする緩やかな文化学のイメージが模索された。そして第3期の改編では、「基礎ゼミ」と「地域文化論」を新しい必修科目とすると共に、同年に立ち上げられた「地域文化学会」と連動して地域との連携を強化しようと努めた<sup>4</sup>。2006(平成18)年には野沢謙治主任の下で郡山をテーマに『地域文化論集』がまとめられ、それぞれの専門分野から6人の学科教員が論文をまとめた<sup>5</sup>。これらが文化学科としての「文化学」を考える際の手掛かりと言えるが、それは決して厳格に定義されたものではなく、時代と地域の要求に応えながら緩やかな総体を形作ってきたと言える。

本論は、こうした本学の「文化学」の新たなスタートを機に、筆者の専門とする西洋史学との接点を探求することを課題とする。具体的には、神話・メルヘンにはじまる歴史叙述の歴史を辿ることで、次第に中世に「現代史」への関心が高まり、啓蒙主義時代を経て、19世紀に学問としての歴史学が生まれたことを整理する。その上で、アナル学派に代表される現在の「社会史」の動きと本学の「文化学」の関係について省察する。

## 1 歴史叙述のはじまり

### (1) 神話

歴史の始まりは物語であり、その多くが神話として語り継がれている。この神話は、人類創成から民族・国家の起源と結びつくことで、その時代や地域の特定の世界観を表現し、宗教と不可分な関係を築くことで体系化されていく。それ故、中国や日本の神話<sup>6</sup>から、アフリカや新大陸の広範囲に及ぶ世界各地の神話は、少なからず歴史性を帯びていると言える<sup>7</sup>。

ヨーロッパ文明に先行する古代地中海世界では、メソポタミアやエジプトの影響を受けたギリシア神話やローマ神話が建国神話として発展した<sup>8</sup>。ヘロドトスやトゥキディデスといった歴史家にとっても神話は身近な歴史的情報の一部だった<sup>9</sup>。トロヤに起因するロムス・レムス兄弟のローマ建国神話は、リヴィウスの『ローマ史』に影響を与え、プルタルコス『英雄列伝』は、時代を超えたベストセラーとしてヨーロッパ文明を支える古典となった<sup>10</sup>。

ユダヤ教・キリスト教の神話は『聖書』となって整理され、中世の歴史叙述の基盤となるが、それ以前の異教的神話の多くもその時代や地域・民族の世界観を伝える役割を担っていた。ギリシア神話・ローマ神話だけでなく、ケルト・ゲルマン・スラヴ諸族の神話も多くの共通点と

多様性を並立させながら、この世界の成り立ちや諸民族のルーツにまつわる物語を伝えてくれる<sup>11</sup>。これらは、キリスト教世界の確立と平行な関係で不明瞭な情報へと変化し始め、メルヘンの世界へと流れ込んでいった<sup>12</sup>。

## (2)メルヘン

民話・お伽噺・童話なども訳されるメルヘンは、長い間「歴史」とは無縁な存在として扱われてきたが、20世紀後半から文学や民俗学、心理学といった従来のメルヘン研究とは異なる立場で新たに歴史学の重要な資料とされるようになってきている<sup>13</sup>。このためには、メルヘンを「集団記憶」と位置づけて、年代や場所、登場人物の特定は不明瞭になっても、その話の出発点には何らかの歴史的事実があると理解することが必要である<sup>14</sup>。社会史の普及に伴って可能となった歴史学によるメルヘン研究は、その起源に普遍的な真理を求めるものではなく、各時代と地域による変容の過程を跡付ける作業と共に歴史記述の一部と見做されるようになっていく。例えば、シンデレラや白雪姫、いばら姫などの物語に描かれる魔女や森の役割が17世紀のCh.ペローや19世紀のグリム兄弟によってどのように書き換えられたのかによって、当時の特定の価値観や文化の諸相を確認することが出来る<sup>15</sup>。

しかし、様々な加筆・修正が行われていることもメルヘンの不可避的な特徴であり、メルヘンのすべてを歴史史料として扱うことはできない。歴史学の基本的な方法論である「史料批判」によって史実を汲み取る作業が必要となる。グリム兄弟のメルヘン研究が法制史研究と不可分に結びついてきたように、メルヘンの歴史学研究には、実証性の高い文献史料や民俗学・社会学などの学際的共働関係が欠かせない<sup>16</sup>。

## (3)世界年代記

キリスト教的歴史記述が中世には主流となるが、聖書の記述から始まって執筆者の生きる現代と同化させることで一部が歴史情報となるのが聖人伝や「世界年代記」の特徴である。歴史を救済史として捉える歴史観は、古代の進歩史観や循環史観とは異なる発展をした<sup>17</sup>。とりわけローマ帝国末期に神学の確立に貢献したアウグスティヌスの『告白録』や『神国論』は、この救済史観の確立にも大きな影響力を持った<sup>18</sup>。また彼の友人でもあったオロシウスが著した『異教徒に反対する七巻の書』(*Historiae adversum paganos*)は、中世において歴史教本として広く読まれることとなった<sup>19</sup>。

中世初期、6世紀にフランク史をまとめたトゥールのグレゴリウスの『歴史十巻』<sup>20</sup>、8世紀イングランドのベータの『教会史』(*Historia ecclesiastica gentis Anglorum*)などは聖職者たちによって叙述されたが、救済史的終末に繋がる前段階としてローマ世界に入ってきたゲルマン諸民族の起源や業績を伝える役割も担っていた<sup>21</sup>。

また、カロリング朝期以降、キリスト教の異教世界への普及・拡大を追うこと、キリスト教世界の形成の歴史を描き出そうとする試みが多数出現した。例えば、「カロリング・ルネサンス」を代表するアインハルトは、スエトニウスの『ローマ皇帝伝』を模倣しながら『カール大帝伝』を書き上げたが、ここでは異教徒ザクセン人の征服と改宗が大きな関心を集めた<sup>22</sup>。10世紀にはコルヴァイのヴィドゥキントが『ザクセン人言行録』(*Res gestae Saxonicarum*)をオットー大帝の娘マティルデに献呈した<sup>23</sup>。更に聖職叙任権闘争期の不安定な状況と東方植民によるエルベ以東地域や北欧諸国への関心の増大、利害関係の緊密化などが、辺境地域のキリスト教化と連動して聖職者だけでなく、世俗の権力者たちの現代史と一族の歴史への関心を増幅させた。12世紀以降には、プラハのコスマスの『ボヘミア人史』(*Chronica Bohemorum*)やデーン人のサクソ・ゲルマニクスの『デンマーク人言行録』(*Gesta Danorum*)が登場し、ピカルディのノジャン修道院長ギベールの第1回十字軍史『フランク人による神の言行録』(*Gesta Dei per Francos*)も執筆された<sup>24</sup>。11世紀前半のラテン語年代記『歴史』(*Historia*)の著者、クリュニー修道士ラウル・グランベールは「我々はローマ世界においてカトリックの信仰と正義の僕たちを栄光あらしめた名高き人々につき、信じるに足る報告と、我々が見たことに基づいて語る」と述べているが、こうした意識は「12世紀ルネサンス」において急速に明瞭化しはじめた現代と歴史への関心、および個人主義的特徴を明瞭に表している<sup>25</sup>。

12世紀のフライジング司教オットーの『年代記あるいは二つの国の歴史』(*Chronica sive historia de duabus civitatibus*)は、中世の「世界年代記」の最高峰とされる<sup>26</sup>。聖職者でもあったオットーにとって歴史を救済史として位置付けることは至極当然であったが、同時にシュタウファー皇帝家に繋がる彼は、甥の皇帝フリードリヒ1世の事績録をも遺している。同時代のビザンツ、イスラムにおける歴史叙述はヨーロッパよりも遥かに進んでおり、詳細な事実報告や普遍史の形成に及んでいたが<sup>27</sup>、こうした新しい歴史観と情報が盛期中世以降に西欧に流れ込み、上記のような同時代史への関心を大きく促進した。

また修道士たちは、多くの著作の写本を作成した。古典の写本作成から新しい著作に至るまで、修道士たちは祈りの勤めの一環として辛い作業を辛抱強く行った<sup>28</sup>。修道院の図書館の蔵書は彼らの努力の賜物であり、大学での学びを支える重要な基盤ともなっていた。

#### (4) 都市年代記

盛期中世から世俗の歴史記述が散見されるようになる。中世都市の発展が独自の関心を生み、自分たちの都市の繁栄や時代の事件を救済史とは無縁の価値観で書き記そうとする動きが見え始め、中世後期には盛んになる<sup>29</sup>。14・15世紀には殆どの中世都市がもつようになっていたと考えられる都市年代記は、韻文時代史(Reim Chronik)として初期中世からの俗語による口伝民衆詩歌の伝統を引いているとされるが、12世紀以降に普及・定着してくる文書主義と中世都

市民層における識字能力の向上が背景にあった<sup>30</sup>。

中世都市の特徴を明示する都市図の登場も15世紀頃から盛んになる。1493年にラテン語とドイツ語で出版されたニュルンベルクの人文主義者ハルトマン・シェーデルの『世界年代記』<sup>31</sup>以降、S. ミュンスターの『コスモグラフィア』(*Cosmographia*.1544)、G. ブラウンとF. ホーヘンベルクの『世界都市帳』全6巻(*Civitates orbis terrarum*.1576～1617)などが出版され、17世紀半ばのM. メリアンの『ヨーロッパの地誌』シリーズ(*Topographia*.1642～1688)をはじめとする膨大な都市鳥瞰図の出現に繋がった<sup>32</sup>。

地域への関心の増大については上述したが、「世界年代記」の救済史の枠組みを利用した記述から、次第に目の前で生じた事実への関心が増大することが確認できる。筆者も利用する12世紀北独ホルシュタインの司祭であったボーサウのヘルモルトが著した『スラヴ人年代記』(*Chronicon Slavorum*)には、同時代に活躍したハインリヒ獅子公をはじめとする諸侯の赤裸々な姿が克明に描き出されており、後にハンザ同盟の盟主となるリューベック建設やシュヴェリンをはじめとする「獅子公の諸都市」の誕生が同時代感覚で伝えられる<sup>33</sup>。またこの頃から貴族の家門意識が確立されてくるが、家系への関心が高まり、各地で多くの家門史が一族ゆかりの教会・修道院の聖職者によってまとめられ始める。『ヴェルフエンの歴史』(*Historia Welforum*)は、その最初期の代表例である<sup>34</sup>。

#### (5) 人文主義～啓蒙主義の歴史叙述

ヨーロッパにおける歴史的情報の源泉のひとつに旅の記録がある。盛期中世から流行する巡礼や十字軍の記録は、旅の案内書へと発展し、商人たちの旅行記と合流していく<sup>35</sup>。上述の都市年代記や地誌情報の増大は、こうした中世のツーリズムとも接点を持っていた。そして大航海時代の到来は、更に多くの未知の情報をヨーロッパにもたらし、活版印刷術の普及とも相まって沢山の情報を提供するようになる<sup>36</sup>。

こうした状況下で古典的知識と新しい情報を整理・分離する辞書の類も多数登場し、これは18世紀の啓蒙主義時代の到来によって、『百科全書』として結実する<sup>37</sup>。歴史記述もこの時代に飛躍的に発展する。中世の救済史観が用いた四王国思想や6時代区分が批判的に検証され始め、ペトルルカをはじめとするルネサンスの人文主義者たちによって「暗黒の中世」像が提唱された。そして17世紀末のドイツの歴史学者Ch.ケラリウスによって古代・中世・近代の3時代区分が定着し、啓蒙思想家たちが歴史を神学から解放したと評価される<sup>38</sup>。しかし、近代的歴史学の誕生に大きな一歩を踏み出した啓蒙主義ではあったが、彼らの多くが理性に基づく自然科学的合理主義の影響を受けて人類の完全無欠な進歩を信じ、この進歩の一般的因果法則を解明することを歴史叙述の課題と考えることで、啓蒙の歴史家は、歴史家である前に「哲学者」だった、と評される<sup>39</sup>。

急激に増大した世界の情報を歴史として整理する上で、彼らは文化・文明の普遍的真理を想定し、また追求することで世界各地の文明と歴史の各時代に優劣を付けていった<sup>40</sup>。これはヨーロッパ文明を普遍文明として人類と世界史を描くヨーロッパ中心史観の形成に決定的な役割を果たしたと言えるだろう<sup>41</sup>。

## 2 近代歴史学の誕生と発展

### (1) ランケ史学と政治史

19世紀の近代学問としての歴史学の特徴は、実証史学であることだ。それまで伝承として伝えられてきた情報を客観的に実証するために史料批判が行われることとなる。客観的な史実の特定のためにベルリン大学のL.フォン・ランケは、政治史、とりわけ外交史・戦争史を重視した<sup>42</sup>。こうした動向を支えた研究分野として法制史と国制史研究が欠かせなかった<sup>43</sup>。また1826年からプロイセンが始めた「モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ」(*Monumenta Germaniae Historica*)の編纂事業は今日まで続いており、多くの国々の歴史史料編纂の手本となった<sup>44</sup>。君主や王侯貴族といった為政者中心の歴史叙述と近年は批判されるが、第三者的な史料批判に耐えうる史料となると、その性質は自ずと限定されてくる。政治史が近代ヨーロッパに成立した歴史学の中心となったのは、史料的な必然であったと言える。この歴史学は、1887年(明治20年)にランケの下で学んだL.リースがお雇い外国人として東京帝国大学に招かれることで、日本の歴史学の基本となっていった<sup>45</sup>。

こうしてヘーゲルの歴史哲学<sup>46</sup>から分離した「歴史学」は、形而上学的な法則の追求から解放された反面、現実の政治活動と密接な関連性を持つことになった。とりわけドイツでは、プロイセン学派に代表されるナショナリズムと深く結びついた研究活動がナチ史学に通じる負の系譜を産むことともなった<sup>47</sup>。19世紀の西欧諸国の歴史学は、現実政治やロマン主義などと結びつくことで多かれ少なかれナショナリズム的性格を持ったが、第二次大戦後にフリードリヒ・マイネッケが行った歴史主義批判は、歴史学の基本を確認する上で重要である<sup>48</sup>。

### (2) 文化史の展開

バーゼル大学のJ.ブルクハルトの歴史学研究は、『イタリア・ルネサンスの文化』に見られるように文化史の重要性を提唱した<sup>49</sup>。彼のルネサンス評価は、文化復興運動という単なる「再生」ではなく、近代的価値観の台頭としての人文主義フマニスムの評価だった。彼の人間を対象とした歴史学研究は、Ch.H.ハスキンスの『12世紀ルネサンス』をはじめとする新しい研究活動を引き出し、個人主義の覚醒から人文主義・啓蒙主義を経て近代の合理主義に注ぎ込む近代化の歴史像の形成に繋がった。彼の学問的立ち位置は、政治史家である師ランケと対蹠的に見られ

るが、扱う史料は異なっても実証を重んじた点では同じだったと言える<sup>50</sup>。

しかし、その後の文化史は、美術史や文学史、あるいは民俗学的生活史として政治史に対する特定の一分野を指す用語として矮小化される傾向があった。そうした中、オランダのJ.ホイジンガの研究は文化史の新たな可能性を切り開いたと言える<sup>51</sup>。中世後期のブルゴーニュ公国の宮廷を中心にまとめられた『中世の秋』が「暗黒の中世」像の転換に寄与しただけでなく、『ホモ・ルーデンス』で展開された人間に対する眼差しは、M.ヴェーバーやE.トレルチの研究と共に唯物史観に対する有効な批判的方法論となった<sup>52</sup>。ホイジンガは「文化史が政治史及び経済史から区別されるのは、より深遠なもの、普遍的なものへの指向を意識しつつけているからこそ、その限りにおいて文化史の名にふさわしい、という理由からだ。」「ただ全体としてのみ成立するのが文化である。」と述べている<sup>53</sup>。

文化史の展開にとって、ヨーロッパにおける民俗学的な地域研究の伝統<sup>54</sup>と形態学的な総合化を目指す姿勢は重要だったと言える。例えば、N.エリアスの『文明化の過程』<sup>55</sup>に見られるようなスケールの大きな社会学的アプローチは、後代の社会史研究との連携に不可欠だった。

### (3) 唯物史観・マルクス史学と社会経済史

従来の為政者中心の政治史に対して、「民衆の歴史を描きたい」という要望が経済史研究の根底にはある。この分野に大きな影響を与えたのがK.マルクスの唯物史観である<sup>56</sup>。彼は「経済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解する」ことを目的とし、それ故、あくまでも歴史の全体的法則を追求した<sup>57</sup>。個別情報としては決して登場しない貧しい農民や労働者の生活と歴史を描き出す方法として物(食物・生産物など)の移動に着目した経済史は、産業革命とロシア革命後の20世紀に大きく発展した。東西冷戦のイデオロギー対立の中でマルクス史学に批判的な人々も「社会経済史」としてこれを受容したと言える。M.ヴェーバーと共に20世紀後半の歴史学研究に大きな影響を与え、我が国でも「大塚史学」として独自の発展を見た<sup>58</sup>。

更に社会経済史研究は、アメリカを中心に膨大なデータをコンピューターで解析することで、新しい可能性を歴史学に与えた。I.ウォーラステインの近代世界経済システム論などもこうした研究動向の延長線上に位置づけられる<sup>59</sup>。また現代のマルクス史学を代表するE.J.ホブスボームは、労働者の生活や民衆運動の歴史に焦点を当てて社会変革の条件を模索することで、現実社会の市民運動と密接な関係を築きながら、歴史学の現代的有用性を発信している<sup>60</sup>。

### (4) 比較文明学とグローバル・ヒストリー

多くの歴史家による個別研究の蓄積と方法論の相違に基づくアプローチの論争が展開される一方で、20世紀に特徴的な動きとしてO.シュペングラーの『西洋の没落』にはじまる19世紀のヨーロッパ中心史観と進歩思想に対する批判が新しい歴史学の展開にも少なからず影響を与

えた<sup>61</sup>。

歴史を諸要素の融合による文化・文明の形成と変容の歴史として描こうとする動向は、イギリスのA.J.トインビー<sup>62</sup>などに継承され、ヨーロッパ文明だけを普遍文明と見なす特別視を批判して、多系史観を発展させた<sup>63</sup>。文明の起源を古代ギリシア・ローマに求めることが当たり前だった当時のヨーロッパにおいて、歴史を文明の継承ではなく、融合・形成・滅亡の過程と考える視点はH.オバン<sup>64</sup>などによって提唱されていたが、20世紀に大きく浸透していった。その後、1990年代以降に社会史的動向が浸透するとマクロな視点からの歴史認識は一時停滞するが、21世紀に入ると改めてグローバル・ヒストリーとしての見直しが台頭してくる<sup>65</sup>。S. P.ハンティントン『文明の衝突』やM.クック『世界文明一万年の歴史』、Y.N.ハラリ『サピエンス全史』などは、こうした流れの中に位置づけられるだろう<sup>66</sup>。

### (5) アナール学派と社会史の試み

19世紀の歴史主義に対する批判として20世紀初頭から様々な形で歴史学の見直しが行われてくるが、1929年創刊のフランスの学術雑誌『アナール』(*Annales d'histoire économique et sociale*/社会経済年報)を中心に展開される、所謂「アナール学派」の社会史の試みは、現在の歴史学研究の主流となった。

L.フェーヴルやM.ブロックにはじまる新しい歴史学研究は、民衆の日常性や時間・空間の研究といった従来の歴史学が扱わなかった分野を開拓するだけでなく、構造主義哲学と呼応することで新しい全体史の構築を目指す歴史学の大変革運動へと発展した<sup>67</sup>。歴史研究の方法論的特徴としては、従来の文書史料を中心とした実証史学からの脱却を求めて、美術や民俗など学際的な研究の提唱がなされた。

アナール第二世代を代表する理論家のF.ブローデルは、『地中海世界』で国家や民族単位で描かれてきた歴史を「地域」「文化圏」といった切り口で読み直し、三部構成を用いて①構造・環境(長期持続)、②経済や社会の変動(中期持続)、③事件史(短期持続)の三つの時間の相互関係で描こうと試みた<sup>68</sup>。この後、多くの新しい歴史学を試みる研究者たちが、例えば物価や人口の統計を用いた時系列史や心理学を援用した心性史など、多彩な研究を輩出した<sup>69</sup>。これらは、欧米諸国は勿論、1980年代頃からは我が国の歴史研究にも大きな影響を与えた<sup>70</sup>。

日本における社会史の浸透と定着は20世紀末だが、この同時期に社会史は二つの大きな危機に直面したと指摘される<sup>71</sup>。一つは細分化の危機であり、もう一つはより深刻な「記号論による挑戦」である。後者は多様なデータと史料によって構築される全体史像が結局は一人の研究者を介することで個人的なフィクションに陥る、という「言語論的転回」の指摘である<sup>72</sup>。新しい全体史の構築を目指すアナール学派の社会史としては痛烈な指摘である。現在の社会史研究は、こうした批判を受容しながら継続されている。



## おわりに

歴史は、昔から伝えられる神話・伝承から、客観的な史料によって実証される学問となった。この近代歴史学では、政治史・文化史・経済史などの異なるアプローチが相互に批判的に競合することで全体史がイメージされてきたと言える。しかし、アナール学派による社会史の提唱は、実証性の根拠を文書史料に依拠するだけでなく、学際的な研究によって旧来の歴史学では補うことのできなかつた溝を埋める試みが進み、構造史として新しい全体史が目指されるに至っている。「文化人類学」や「歴史人類学」という言葉を耳にする機会が増えたが、こうした新しい学問分野も「社会史」の新たなステップの一つと考えられる<sup>73</sup>。現代の歴史学は、こうして様々な難題に対して、多様なアプローチから取り組んでいるのである<sup>74</sup>。

この歴史学の変化の中で注目されるのが、概念史のアプローチである<sup>75</sup>。従来の歴史学は学術用語を定義することで、歴史の変化、進歩を跡づけようとしてきた。例えば、「国家」とは近代の法治国家であり、封建社会の中世国家はこの点で未熟な存在であり、野蛮な統治機構として評価された。しかし、史料に登場する言葉が同じであっても、その言葉の意味内容は時代や地域によって異なることが指摘されるに至る。19世紀の歴史学は、この点で近代の価値観を過去に投影して歴史を再構築したと言える。ロシアの歴史家M.ステプリン＝カメンスキイは『サガのこころ』において、こうした言葉の概念の変化、価値観の変容を的確に指摘した<sup>76</sup>。これは、アナールの社会史に向けられた「記号論による挑戦」に発する「言語論的転回」への模索とも通じる。それ故、現在の歴史学の大きな特徴は、静態的な歴史像の提示ではなく、動態的な「変化する歴史像」の提示が模索されている。例えば、ポーランドの歴史家K.ボミアンの「繰り返されるヨーロッパの統合」という歴史像は、好例である<sup>77</sup>。

以上、西洋史学の歩みを駆け足で辿ってきたが、本学の文化学科と専攻科文化学専攻が取り組んできた「文化学」とは、こうした「社会史の試み」と非常に近い関係にあると言えよう。少なくとも、筆者が担当してきた西洋史学の立場からは、そうしたイメージで学生の卒業論文や専攻科の研究レポートを指導してきた<sup>78</sup>。そして、それはホイジンガが述べたような広義の「文化史」とも接点を有するものであり、歴史学の立場から言えば、人間の日常の生活を全体史に描き上げる行為だと言える。また、地域文化に注目することで私たちの生活文化をより多面的・複合的に考察する試みは、O.F.ボルノーの哲学に依拠した「生活の総合学問」としての本学の家政学にも通じると言えよう<sup>79</sup>。一般の人々の日常を豊かにすることで、日々の生活にささやかな幸福と彩を与える文化の力を個人から家庭、地域共同体を経て広く公共空間に広げようとする試みは、歴史学の域を超えて広がっていくようである。近年、歴史学と歴史教育を繋ごうとする試みが活発化しているが、これは、情報と社会のグローバル化によって個人と

しての人間が阻害されるという危機に対して、人間が作り出す文化の力を再認する試みとも言えよう<sup>80</sup>。

- 1 『創立四十年学園史』学校法人郡山開成学園 1986年、72～77頁、『創立五十年学園史』学校法人郡山開成学園 1996年、82～88頁、『創立七十年学園史』学校法人郡山開成学園 2016年、108～113頁参照。
- 2 『創立七十年学園史』学校法人郡山開成学園 2016年、113～118頁参照。
- 3 齋藤美保子「文化学科カリキュラム改編について」(『文化学科資格課程報告集』第5集 2003年) 10～11頁。その後、現行のカリキュラムは2014(平成26)年度に単位の実質化を求める文科省の要請に応じて専門科目の多くを半期科目とすると共に必修の「地域文化論」をⅠ・Ⅱとして2年間の学びとするミニマム改革を実施したものだが、カリキュラムの主旨に大きな変更はなかったと言える。これについては、「2014(平成26)年度文化学科専門科目カリキュラム一覧」(『文化学科資格課程報告集』第17集 2015年) 64～70頁参照。
- 4 「地域文化学会」の活動については、『文化学科資格課程報告集』第6集(2004年)～第10集(2008年)に活動記録が掲載されている。
- 5 郡山女子大学短期大学部文化学科 編『地域文化論集』2006年、に會田容弘・竹川重男・何燕生・齋藤美保子・桑野聡・野沢謙治の郡山・福島に関する論文が掲載されている。
- 6 川口勝康・佐々木隆爾『『古事記』と『日本書紀』—日本の歴史思想の源流』(浜林正夫・佐々木隆爾 編『歴史学入門』有斐閣 1992年) 75～103頁。
- 7 例えばカール・ケーレニイは、その特色の一つとして「神話は根拠を説明する。神話は未来、「なぜ」に答えるものではなく、「どこから」に答えるものである。」「神話は始原の出来事、あるいは少なくとも始原的なものについて物語るものだ、と言っても不当な一般化ではない。」と指摘する。K. ケーレニイ、K.G. ユング/杉浦忠夫 訳『神話学入門』晶文社 1975年(原著1951年)、序説「神話の根源と根拠の創設について」22頁参照。
- 8 藤縄謙三『ギリシア神話の世界観』新潮社 1971年、Th.ブルフィンチ/野上弥生子 訳『ギリシア・ローマ神話』岩波文庫 1978年(原著1855年)。
- 9 藤縄謙三『歴史学の起源—ギリシア人と歴史』力富書房 1983年。
- 10 古代ギリシア・ローマの歴史叙述については、林健太郎・澤田昭夫『原典による歴史学入門』講談社学術文庫 1982年、「総説」第2～3章、8～17頁、参照。  
また広義の西洋文明の延長線上に位置する近代社会では、「グレート・ブックス」という新しい概念で古代から近現代に至る多くの著作が人類にとっての古典として再評価されると共に、新たな学びのキーポイントとして注目されている。アメリカ合衆国をはじめとするこの運動については、松田義幸・須賀由紀子・江藤裕之『グレート・ブックスとの対話—「学習社会」の理想に向けて』財団法人かながわ学術研究交流財団 1999年、参照。
- 11 地中海の先進文明世界に対してケルト・ゲルマンなどの周辺民族の文化については、邦語文献は現在でも十分とは言えない。古典的な文献としては、E. トンヌラ、G. ロート、F. ギラン/清水茂 訳『ゲルマン、ケルトの神話』みすず書房 1960年(原著1935年)があり、その後北欧神話研究

- が大きく進展している。これらについては、菅原邦城『北欧神話』東京書籍1984年、J.L.バイヨック／柴田忠作・井上智之 訳『サガの社会史—中世アイスランドの自由国家』東海大学出版会1991年、などを基本文献に、近年は多くの史料翻訳が出されている。
- 12 文学研究の立場からA.ヨレス／高橋由美子 訳『メルヘンの起源—ドイツの伝承民話』講談社学術文庫 1999年(原著1930年)は、神話など単純形式文学の一部としてメルヘンを分類する。これについては、特に第8章、319～360頁参照。
- 13 R.ダーントン／海保眞夫・鷺見洋一 訳『猫の大虐殺』岩波書店 2007年(原著1984年)、J.ザイプス／廉岡糸子 訳『増補 赤ずきんちゃんは森を抜けて—社会文化学からの再話の変遷』阿吶社 1997年(原著1993年)などが、メルヘンの歴史学的考察の先駆的研究と言える。
- 14 高橋義人『グリム童話の世界—ヨーロッパ文化の深層へ』岩波新書 2006年、16頁以下。
- 15 拙稿「“シンデレラ”に見るヨーロッパ文化の諸相—メルヘンの歴史学的一考察」(『郡山女子大学紀要』第46集 2010年)、同「メルヘンとヨーロッパの森の文化—“白雪姫”の事例から」(『郡山女子大学紀要』第47集 2011年)、同「“いばら姫”と魔女—メルヘンに見るヨーロッパの女性像」(『郡山女子大学紀要』第48集 2012年)参照。
- 16 我が国における歴史学によるメルヘン研究としては、森義信『メルヘンの深層—歴史が解く童話の謎』講談社現代新書 1995年、同『メルヘンの社会情報学』近代文芸社 2006年。
- 17 澤田昭夫「キリスト教的救済史観と歴史叙述」(前掲『原典による歴史学入門』)17～22頁。  
また以下の中世の歴史叙述の特徴については、竹野雅人「ヨーロッパの世界年代記と歴史叙述」(前掲『歴史学入門』)105～128頁参照。更に、甚野尚志「年代記を読む—中世ヨーロッパの年代記と挿絵」(東京大学教養学部歴史学研究会編『史料学入門』岩波書店 2006年)149～165頁、はウルリヒ・シュタールの『コンスタンツ公会議の年代記』を例に具体的な年代記の特徴を分かり易く解説している。
- 18 K.リーゼンフーバー「『神国論』におけるアウグスティヌスの歴史理解」(上智大学中世思想研究所 編『中世の歴史観と歴史記述』創文社 1986年)3～38頁。
- 19 中世における古代の歴史著作の読まれ方については、Ch.H.ハスキングズ／別宮貞徳・朝倉文市 訳『12世紀ルネサンス』みすず書房 1989年(原著1927年)、188～232頁参照。
- 20 トゥールのグレゴリウス／兼岩正夫・臺幸夫 訳『トゥールのグレゴリウス歴史十卷(フランク史)』I・II 東海大学出版会 1975・77年／杉本正俊 訳『フランク史 10巻の歴史』新評論 2007年。
- 21 澤田昭夫「ゲルマン世界の歴史叙述」(前掲『原典による歴史学入門』)23～31頁、橋口倫介「中世の年代記—その著作意図をめぐって」(前掲『中世の歴史観と歴史記述』)39～67頁、出崎澄男「中世初期の民族史—歴史記述にあらわれたシュタム意識」(同上)69～88頁。
- 22 エインハルドゥス、ノトケルス／国原吉之助 訳『カロルス大帝伝』筑摩書房 1988年、参照。  
またスエトニウス／国原吉之助 訳『ローマ皇帝伝』上下 岩波文庫 1986年。
- 23 コルヴァイのヴィドゥキント／三佐川亮宏 訳『ザクセン人の事績』知泉書館 2017年。
- 24 十字軍の記録については、第1回十字軍に従軍した聖職者たちによって書かれた複数の記録が邦訳されている(丑田弘忍 訳『フランク人の事績—第1回十字軍年代記』鳥影社 2008年)。また桜井康人「後期十字軍再考(1)—14世紀の聖地巡礼記に見る十字軍観」(『ヨーロッパ文化史研究』第7号 2006年)1～50頁、をはじめとする一連の研究が蓄積されている。
- 25 前掲、橋口54頁。

- 26 池上俊一「十二世紀の歴史叙述と歴史意識」（前掲『中世の歴史観と歴史記述』）89～107頁。W. ケーギ／酒井直芳 訳「天の国と地の国 靈的騎士生活としての王道—フライジングのオットーとサン・ドニのシュジェ」（『世界年代記—中世以来の歴史記述の基本形態』みすず書房 1990年、原著1954年）5～32頁、竹野雅人、前掲「ヨーロッパの世界年代記と歴史叙述」120～123頁。
- 27 林武「聖伝と年代記の世界—イスラムの歴史思想」（前掲『歴史学入門』）129～156頁。ビザンツの歴史叙述については近年、政治・経済・美術に限らない邦語研究が急増しているが、まだまとまったものがない。学術書風のスタイルではないが、箕輪成男『紙と羊皮紙—写本の社会史』出版ニュース社 2004年、第V章「イスタンブール—羊皮紙のビザンツ文明」198～294頁、参照。
- 28 箕輪成男『中世ヨーロッパの書物—修道院出版の900年』出版ニュース社 2006年。
- 29 澤田昭夫、前掲「ゲルマン世界の歴史叙述」30～31頁。服部良久「歴史叙述とアイデンティティ—中世後期・人文主義時代のドイツにおけるその展開」（南川高志 編著『知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開』ミネルヴァ書房 2007年）141～166頁。また後者と関連して青谷秀紀『記憶のなかのベルギー—中世—歴史叙述にみる領邦アイデンティティの生成』京都大学出版会 2011年、参照。
- 中世後期のイタリア商人の年代記が多数残されており、彼らのビザンツ・イスラムからイングランド・フランドルに渡る広範囲な活躍が歴史研究に大きく貢献している。一例としてここでは、14世紀フィレンツェの年代記作者ジョヴァンニ・ヴィッラーニに依拠した清水廣一郎『中世イタリア商人の世界—ルネサンス前夜の年代記』平凡社 1993年、のみを挙げておく。わが国で盛んな中世イタリア都市史研究の成果としては、齊藤寛海・山辺規子・藤内哲也 編『イタリア都市社会史入門—12世紀から16世紀まで』昭和堂 2008年、などがある。
- 30 岡崎敦「文書と法による統治」（堀越宏一・甚野尚志 編著『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』ミネルヴァ書房 2013年）123～140頁。また中世における俗人の識字能力の問題については、大黒俊二『声と文字』岩波書店 2010年、参照。
- 31 ウィルソン・エイドリアン／河合忠信・雪嶋宏一・佐川美智子 訳『ニュルンベルク年代記の誕生』雄松堂出版 1993年、海津忠雄『中世人の知恵—バーゼルの美術から』新教出版社 1984年、127～162頁。
- 32 都市図の歴史については、矢守一彦『都市図の歴史—世界篇』講談社 1975年。その他の文献については、拙稿「旧東ドイツ地域における中世都市の現在—2005年ドイツ原著調査報告」（『郡山女子大学紀要』第44集 2008年）15～34頁の註参照。
- 33 ヘルモルト『スラヴ人年代記』の利用については、拙稿「ハインリヒ獅子公の東方政策とデンマーク—12世紀におけるバルト海沿岸地域の再編」（『西洋史研究』新輯第40号 2011年）など参照。
- 34 ヴェルフエンの家門史編纂については、早川良弥「中世盛期ドイツ貴族の家門意識—ヴェルフエン家の事例」（『家族・世帯・家門』ミネルヴァ書房 1993年）、同「ザクセンにおけるヴェルフエンの家門意識」（関西中世史研究会編『西洋中世の秩序と多元性』法律文化社 1994年）、拙稿「"Historia Welforum"の成立に関する諸問題—ヴェルフエンとヴァインガルテン修道院」（『東海史学』第28号 1993年）、同「ザクセンにおけるヴェルフエンの家系意識の形成—家系記述と政治状況の関連性に関する一考察」（『西洋史学』第179号 1995年）など参照。また拙稿「貴族身分と封建制」（前掲『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』）110～116頁部分とコラム「ハインリヒ獅子公から見える家門意識の形成」121～122頁参照。

- またシュタウファーについては、西川洋一「初期シュタウファー王権における家門意識の形成過程」(国家学会編『国家と市民』1 有斐閣 1987年) 387～426頁、山本伸二「シュタウフェン家の台頭」(『天理大学学报』第65巻第2号 2014年) 67～86頁。
- 35 サンチャゴ・デ・コンポステラへの巡礼を例に、関哲行「巡礼と観光—「余暇社会学」序説」(甚野尚志・堀越宏一 編著『中世ヨーロッパを生きる』東京大学出版会 2004年) 269～285頁参照。またN.オーラー／藤代幸一 訳『中世の旅』法政大学出版局 1989年(原著1986年)、J.P.ルゲ／井上泰男 訳『中世の道』白水社 1991年(原著1984年)など参照。P.サントニーノ／舟田詠子 訳『中世東アルプス旅日記』筑摩書房 1987年、は1485～7年に教皇使節の一員としてチロル周辺地域を回った貴重な記録の翻訳である。
- 36 高宮利行『ゲーテンベルクの謎—活字メディアの誕生とその後』岩波書店 1998年。
- 37 澤田昭夫「宗教改革の歴史叙述と古文書学の発展」「啓蒙時代の歴史叙述」(前掲『原典による歴史学入門』) 33～42頁・42～45頁参照。百科全書については、桑原武夫 編著『フランス百科全書の研究 1751—1780』岩波書店、1954年(復刊1970年)の後に多くの抄訳・部分訳が出版されたが、中川久定・村上陽一郎などによって『十八世紀叢書』全10巻(国書刊行会)として1997年より各巻が刊行中である。またイギリスの事例として、本田毅彦『大英帝国の大事典作り』講談社選書メチエ 2005年、は『ブリタニカ百科事典』や『オックスフォード英語辞典』の成立背景を扱っている。
- 38 澤田昭夫「歴史観の転換・16～18世紀」(前掲『原典による歴史学入門』) 31～33頁。ルネサンス期の古典と歴史叙述の関係については、藤井崇「古典の復興と人文主義リアリティ」(前掲『知と学びのヨーロッパ史』) 91～115頁、浜林正夫「近代歴史学の成立」(前掲『歴史学入門』) 第1節「ルネサンスの歴史意識」157～160頁、参照。
- 39 澤田昭夫、前掲「啓蒙時代の歴史叙述」(前掲『原典による歴史学入門』) 43頁。
- 40 弓削尚子『啓蒙の世紀と文明観』<世界史リブレット88> 山川出版社 2004年。
- 41 古代地中海世界から中世に継承された「普遍史」の観念が近代化の過程で危機を迎えると共に「世界史」へと変容していった過程については、岡崎勝世『聖書vs.世界史—キリスト教的歴史観とは何か』講談社現代新書 1996年、同『世界史とヨーロッパ—ヘロドトスからウォーラーステインまで』講談社現代新書 2003年、参照。
- 42 村岡哲『ランケ』有斐閣 1959年、同『レーオポルト・フォン・ランケ—歴史と政治』創文社 1983年。L.フォン・ランケ／鈴木成高・相原信作 訳『世界史概説—近世史の諸時代』岩波文庫 1941年／村岡哲 訳『世界史の流れ—ヨーロッパの近・現代を考える』筑摩書房 1998年(原著1854年)。
- 43 ドイツにおける法制史・国制史研究の特殊性については、村上淳一『ゲルマン法史における自由と誠実』東京大学出版会 1980年、に詳しい。
- 44 G.P.グーチ／林健太郎・林孝子 訳『十九世紀の歴史と歴史家たち』上・下 筑摩書房 1971・1974年(原著1952年)の第5章『「モヌメンタ」』64～75頁参照。また19世紀のドイツにおいて近代歴史学が確立した背景については、佐々木博光「啓蒙主義と人文学—近代ドイツにおける歴史の科学化、科学の歴史化」(前掲『知と学びのヨーロッパ史』) 167～192頁参照。
- 45 L.リース／原潔・永岡敦 訳『ドイツ歴史学者の天皇国家観』新人物往来社 1988年(原著1905

- 年) 所収の木村時夫「ルートヴィヒ・リースと日本の歴史学」20～25頁参照。
- 46 G.W.F.ヘーゲル／武市健人 訳『歴史哲学』上下 岩波文庫 1971年。
- 47 林健太郎「近代歴史学の成立」「ナショナリズムと歴史学」(前掲『原典による歴史学入門』)46～52・52～55頁。「ドイツの特殊な道」と称される近現代史の歩みは、歴史学の展開とも深く結びついていた。「プロイセン学派」については、前掲『十九世紀の歴史と歴史家たち』第8章「プロイセン学派」130～160頁参照。またH.-U.ヴェーラー／ドイツ現代史研究会 訳『ドイツの歴史家』全5巻 未来社 1982年、および現在進行形の「歴史家論争」については、J.ハーバーマス・他／徳永恂・他 訳『過ぎ去ろうとしない過去—ナチズムとドイツ歴史家論争』人文書院 1995年(原著1987年)参照。F.-L.クロー／小野清美・原田一美 訳『ナチズムの歴史思想—現代政治の理念と実践』柏書房 2006年(原著1998年)。
- 48 「歴史主義」の問題については、浜林正夫、前掲「近代歴史学の成立」第3節「歴史主義」167～173頁。F.マイネッケ／矢田俊隆 訳『ドイツの悲劇』中公文庫 1974年(原著1946年)。また西村貞二『マイネッケ—人と思想』清水書院 1981年、同『ヴェーバー、トレルチ、マイネッケ—ある知的交流』中公新書 1988年、参照。
- 49 J.ブルクハルト／柴田治三郎 訳『イタリア・ルネサンスの文化』上下 中公文庫 1974年(原著1860年)。K.レーヴィット／西尾幹二・瀧内楨雄 訳『ブルクハルト—歴史の中に立つ人間』TBSブリタニカ 1977年(原著1966年)、野田宜雄『歴史をいかに学ぶか—ブルクハルトを現代に読む』PHP新書 2000年、参照。
- 50 林健太郎「近代歴史学の発展」(前掲『原典による歴史学入門』)56頁。
- 51 里見元一郎『ヨハン・ホイジンガー—その歴史観と文明論』近代文芸社 2001年。J.ホイジンガー／兼岩正夫・里見元一郎 訳『中世の秋』河出書房新社 1972年／堀越孝一 訳『中世の秋』上下 中公文庫 1976年(原著1923年)、同／高橋英夫 訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫 1973年／里見元一郎 訳『ホモ・ルーデンス—文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み』講談社現代文庫 2018年(原著1938年)。
- 52 M.ヴェーバー／大塚久雄 訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(改訳)岩波文庫 1989年(原著 1920年)、E.トレルチ／内田芳明 訳『ルネサンスと宗教改革』岩波文庫 1959年(原著1913年)。
- 53 J.ホイジンガー／里見元一郎 訳「文化史の課題」(原著1929年)(『文化史の課題』東海大学出版会 1978年)17頁。
- 54 20世紀以降の歴史研究における地域史研究の重要性は、19世紀の国家や民族中心の歴史研究への批判としても重要であった。ドイツの地域史研究を例に、増田四郎『歴史学概論』講談社学術文庫 1994年(原書1966年)245～301頁、山田欣吾『国家そして社会—地域史の視点』創文社 1992年、所収の諸論文、特に第X・XI論文を参照。
- 55 N.エリアス／赤井慧爾・中村元保・吉田正勝、波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之 訳『文明化の過程』上・下 1977・8年(原著1969年)。
- 56 浜林正夫、前掲「近代歴史学の成立」第4節「マルクス主義」173～178頁。マルクス史学の理解には多数の文献があるが、著作以外に筆者が若い時代に学んだものではE.フロム／樺俊雄・石川康子 訳『マルクスの人間観』合同出版 1970年(原著1961年)、高田求『世界観の歴史—唯物論と観念論のたたかい』学習の友社 1974年、などである。

- 57 林健太郎、前掲「近代歴史学の発展」58頁より引用。
- 58 社会経済史への関心の増大は、1930年(昭和5年)に「社会経済史学会」「歴史学研究会」が創設されるなど、我が国の歴史学研究に大きく影響した。「大塚史学」については、大塚久雄『共同体の基礎理論—経済史総論講義案』岩波書店 1955年(岩波現代文庫 2000年)、同『社会科学の方法—ヴェーバーとマルクス』岩波新書 1966年、など参照。
- 59 I.ウォーラステイン／川北稔 訳『近代世界システム—農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』I II 岩波書店 1981年(原著1974年)。その他、多数翻訳されている彼の研究概要は浜林正夫、「現代歴史学の諸潮流」(前掲『歴史学入門』)第2節「民族解放の歴史学」195～199頁。
- 60 浜林正夫、前掲「現代歴史学の諸潮流」第4節「マルクス主義史学の新しい潮流」203～211頁。ホブスボームの著作は多数翻訳されているが、ここではE.ホブスボーム／青木保 編訳『犯行の原初形態』中公新書 1971年(原著1959年)、同／原剛 訳『ホブスボーム歴史論』ミネルヴァ書房 2001年(原著1997年)のみを挙げておく。
- 61 O.シュペングラー／松村正俊 訳『西洋の没落』全2巻 五月書房 1982年(原著1918—22年)。<中公クラシックス>として2017年に復刊。
- 62 A.J.トインビー／下島連・他 訳『歴史の研究』全25巻 「歴史の研究」刊行会 1966—72年。
- 63 村上泰亮『文明の多系史観—世界史再解釈の試み』1998年。
- 64 平城照介「ヘルマン・オーバンの文化連続論」(『北海学園論集』3 1958年)19～32頁。
- 65 現在、模索されているこの問題については、羽田正 編『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社 2017年、所収の13本の論文が研究の現状を伝えてくれる。また、今日の歴史学の基礎を確立した「19世紀」という時代を問い直す試みも生まれている。我が国でも『19世紀学研究』が2008年から刊行されている。これらについては、森田直子「『19世紀学』・ヨーロッパ・歴史学—オスターハンメル『世界の変貌：一つの19世紀史』を手がかりに—」(『19世紀学研究』第5号 2012年)参照。
- またグローバルヒストリーの手法を支える科学理論との関係については、B.C.ヴィッカー／村主朋英 訳『歴史のなかの科学コミュニケーション』勁草書房 2002年(原著2000年)、ピーター・ターチン／水原文 訳『国家興亡の方程式—歴史に対する数学的アプローチ』ディスカバー・トゥエンティワン 2015年(原著2003年)参照。
- 66 S.P.ハンティントン／鈴木主税 訳『文明の衝突』集英社 1998年(原著1996年)、M.クック／千葉喜久枝 訳『世界文明一万年の歴史』柏書房 2005年(原著2003年)、Y.N.ハラリ／柴田裕之 訳『サピエンス全史—文明の構造と人類の幸福』上下 河出書房新社 2016年(原著2011年)。
- 67 アナール学派の歴史と特徴については、P.バーク／大津真作 訳『フランス歴史学革命—アナール学派 1929—89年』岩波書店 1992年(原著1990年)、竹岡敬温「フランス「アナール」学派と「新しい歴史」」(竹岡敬温・川北稔 編著『社会史への途』有斐閣 1995年)3～74頁。
- 68 浜林正夫、前掲「現代歴史学の諸潮流」第3節「民衆の歴史学」199～203頁。F.ブローデル／浜名優美 訳『地中海』全5巻 藤原書店 1991年—1995年(原著1949—66年)、同／金塚貞文 訳『歴史入門』太田出版 1995年(原著1976年)。
- 69 例えば、L.フェーヴル、G.デュビイ、A.コルバン／小倉孝誠 編・訳『感性の歴史』藤原書店 1997年、Ph.アリエス／杉山光信・杉山恵美子 訳『「子供」の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房 1980年、同／伊藤晃・成瀬駒男 訳『死と歴史—西欧中世から現

- 代へ』みすず書房 2006年、G.デュビイ、M.ペロー監修『女の歴史』全5巻・10分冊・別館2巻 藤原書店 1994年、J.ル・ゴフ／桐村泰次 訳『中世西欧文明』論創社 2007年(原著1964年)、A.コルバン／渡辺響子 訳『レジャーの誕生』藤原書店 200年(原著1995年)など参照。
- 70 川北稔「イギリス「残余の要因」から「全体史」へ」(前掲『社会史への途』)75～140頁。早島瑛「ドイツ 社会と国家のはざままで」(同上)141～205頁。  
ドイツにおける歴史学の現状については、G.イッガース／中村幹雄・末川清・鈴木利章・谷口健治 訳『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房 1986年(原著1975年)J.コッカ／肥前栄一・杉原達 訳『歴史と啓蒙』未来社 1994年(原著1989年)参照。またK.ボズル／三宅立 訳「<sup>ゲゼルシャフトゲシヒテ</sup>社会史と<sup>ソツィアールゲシヒテ</sup>社会史—中世をモデルケースとして」(共訳『ヨーロッパ社会の成立』東洋書林 2001年)321～347頁は、アナールとは異なる立場から社会史を模索する姿を教えてくれる。  
日本の歴史学への影響は、1982年の『社会史研究』(日本エディタースクール)の刊行に象徴的に確認できるが、西洋史だけでなく日本史研究者と共同で出された一般向けのものとして、阿部謹也・網野善彦・石井進・樺山紘一『中世の風景』上下 中公新書 1981年、は興味深い。
- 71 渡辺和行「歴史学の危機と『アナール』—21世紀の社会史に向けて」(『奈良女子大学文学部研究年報』第3号 2007年)49～62頁。
- 72 例えば、ポール・ヴェーヌ／大津真作 訳『歴史をどう書くか』法政大学出版局 1982年(原著1971年)の指摘は、歴史を科学にしようとしてきた19世紀以来の試みを厳しく批判することで、新しい歴史学の課題を明瞭にさせている。渡邊二郎『歴史の哲学—現代の思想的状況』講談社学術文庫 1999年(初版、財団法人放送大学教育振興会 1995年)は、こうした歴史認識をめぐる哲学的問題をベルンハイムからヘーゲル、マルクス、ウェーバー、ディルタイ、ハイデッカー、ヤスパースに至る広範な哲学者の歴史観を取り上げて検討している。
- 73 竹岡敬温、前掲「フランス「アナール」学派と「新しい歴史」」54～67頁。例えば、ル・ロワ・ラデュリ／樺山紘一・木下賢一・相良匡俊・中原嘉子・福井憲彦 訳『新しい歴史—歴史人類学への道』新評論 1980年(原著1973・1978年)。
- 74 例えば、小田中直樹『歴史学のアポリア—ヨーロッパ近代社会史再読』山川出版社 2002年、同『歴史学ってなんだ?』PHP新書 2004年、参照。
- 75 平城昭介「A.O.マイヤー『Staat [国家] という言葉の歴史に寄せて』翻訳」(共著『伝統社会と近代国家』岩波書店 1982年)27～50頁。
- 76 M.ステプリン＝カメンスキイ／菅原邦城 訳『サガのころ—中世北欧の世界へ』平凡社 1990年(原著1971年)。
- 77 K.ポミアン／村松剛 訳『ヨーロッパとは何か—分裂と統合の1500年』平凡社 1993年(原著1990年)。
- 78 筆者が文化学科で西洋史を学ぶ入り口にあたる「国際文化史」のテキストとして執筆したのが、桑野聡『大学で学ぶための西洋史概説』全2巻 DTP出版 2006年である。ここでは、歴史を単なる暗記科目として自分の外にある情報ではなく、歴史情報を用いて人間の作り出す社会や文化を考える学問と位置付けた。E.H.カー／清水幾太郎 訳『歴史とは何か』岩波新書 1962年(原著1961年)の「歴史とは現在と過去との対話である」という言葉とM.ブロック／讚井鉄男 訳『歴史のための弁明—歴史家の仕事』岩波書店 1956年(原著1942年)は、重要な道案内役である。また、樺山紘一 編『現代歴史学の名著』中公新書 1989年、には日本人研究者も含めた21冊の名著が簡潔に紹



介されており、有益である。

- 79 関口富左・高館作夫・真船均・影山彌「家・家庭・家族の人間的意味」(関口富左 編著『人間守護の家政学—福祉社会の実現をめざして』家政教育社 1999年) 45～74頁。筆者は同書において第4部「生活の社会文化的領域」第3章「生活と文化」の第4節「欧米諸国における生活と文化」(264～276頁)を担当し、ヨーロッパ(欧米)文化の形成を中世以来の貴族文化の形成と変容を例に考察した。
- 80 坂本多加雄『歴史教育を考える—日本人は歴史を取り戻せるか』PHP新書 1998年、山田朗 編『歴史教育と歴史研究をつなぐ』岩波ブックレットNo.712 2007年、南塚信吾『世界史なんていらない?』岩波ブックレットNo.714 2007年、佐藤昇 編・神戸大学文学部史学講座『歴史の見方・考え方』山川出版社 2018年、長谷川修一・小澤実 編『歴史学者と読む高校世界史—教科書記述の舞台裏』勁草書房 2018年。

また近年「パブリックヒストリー」という概念が注目されている。

「国際パブリックヒストリー連盟」(IFPH)が結成されたことを受けて、我国でも「パブリックヒストリー研究会」が2019年3月13日に東洋大学で第1回公開研究会を開催した。ここに至る概略としては、菅豊(東京大学)・岡本充弘(東洋大学)たちが中心となって、2016年9月10日、東京大学東洋文化研究所で開催された「現代民俗学会第33回研究会」において「パブリックヒストリー—多様な歴史実践から生まれる開かれた歴史」と題するシンポジウムが実施され、2018年11月17日には明治大学駿河台キャンパスで現代史研究会がシンポジウム「公共史／パブリックヒストリーと現代史—『越境する歴史認識』をめぐって」が開催された。SNSをはじめとする情報の拡散する現代、フェイクニュースや歴史修正主義と歴史学がどのように関係していくのかが問われている。

追記： 本論文は、2018年度より筆者が担当する専攻科文化学専攻の必修科目「文化史概論」前期において専攻科1年生の講義テキストとして執筆した。それ故、邦語文献を中心に掲載したことをお断りする。